

〔平成十一年度大会シンポジウム〕特集・丸山思想史学の地平ⅡⅡ〔方法〕の問題を中心に

丸山眞男における現代・伝統・思想史

松沢 弘陽

序 丸山眞男における近代と現代

丸山眞男は彼の学問生活の初めから、今日、近代後期（レイト・モダンテイ）ないしポスト・モダンとよばれる局面の問題を強く意識していた。敗戦後直後には丸山は、この局面を「近代の延長としての、しかもいわゆる『近代』から区別された『現代』」（座談会「現代社会における大衆」一九四九年、なお座談会「現代とは何か」一九五四年、も参照）と概念化するにいたった。近代（化）の問題と現代（化）の問題とが同時に生起しているのが世界史における日本の特有の境位だというのが、彼がくり返しのべる認識だった（早い時期の発

言として、対談「学生の表情」一九四六年）。この日本における近代（化）と現代（化）の同時性という状況認識から、現代日本について多義的な課題が設定された。一方では、「近代精神」を批判して、それを超える「現代精神」の創出を主張した（前出「学生の表情」、なお前出席談会「現代社会における大衆」、座談会「日本人の道徳」一九五三年、なども参照）。他方、一九三〇年代の「近代の超克」論の台頭とそれを唱えた人々の、総力戦体制に流れ込む転向を眼のあたりにして以来、逆に近代の再認識と擁護を志し、自らを季節はずれの一八世紀啓蒙の子として意識するようになった。

一、丸山の政治学研究における「現代」の問題

政治学から日本思想史にわたる丸山の学問は、このような問題関心によって導かれていた。この「現代」の問題を問うという関心は、先ず政治の実証的分析の領域に現われた。丸山が近代初期の古典的デモクラシーにかわつて一九世紀後半以降登場すると見る、大衆デモクラシーの問題がそれである。丸山は政治学研究の初めから、このような「現代」に固有の政治の問題を抱いていたが、戦後いち早くそれを彼の政治学の中心に押し出した。戦後初期の彼の議論には一方で日本における近代化の徹底への促しと他方で近代後期Ⅱ現代の問題の分析とが交錯していた。戦後日本の政治学において、丸山はおそらく近代後期における政治の問題にとりくんだ最も早いケースだったといえる。丸山の近代後期の政治についての議論は、その視点や内容においてもきわだった特色を示している。彼は、彼のキイ・コンセプトを使えば「現代」という「政治化の時代」について、政治の機構論よりはむしろ、文明論的な接近に重きをおいた。「政治化の時代」における、自我の変容、自我の深層に根ざす政治的無関心の蔓延という逆説、その中で自由の運命といった問いがその中心である。

政治学における丸山のこのような研究を代表するのは『政治の世界』（一九五二年）に始まる一連のモノグラフ、特に「現代における……」と題するいくつかの論文であり、その冠をなすのは、「現代における人間と政治」（一九六一年）だろう。そこでは一九三〇年代ドイツのファシズム化と冷戦期の米国とにおける「ファシズム化」の動態が重ね合わされている。社会の全面的な画一化（グライヒシャルトゥンク、イデオロギーと体制との癒着（正統の形成）による社会の自閉化、自我とコミュニケーションの変容などがその中心問題である。

二、丸山の思想史研究における現代の危機と

伝統の創出

丸山の日本思想史研究においても、近代後期の問題性への関心は、その初めから一貫していた。彼の思想史研究の初期を飾る「近世儒教の発展における徂徠学の特質並びにその国学との関連」（一九四〇年）においても、「福沢諭吉の哲学」（一九四七年）においても、丸山を徂徠や福沢に導いた近代への関心は、すでに近代が孕む問題性、近代後期の問題性への問いを含んでいることがうかがわれる。

しかし彼の思想史研究に近代後期の問題性への問いがク

ローズアップされて来るのは、一九五〇年代末だったといえよう。それは彼個人については研究の中心領域を政治学から日本思想史へと移した時期であり、同時代史的には、高度成長の始まりと戦後―戦後民主主義―戦後啓蒙の終りが、知識人たちに意識されるに至った時期である。

もちろん、「現代」の問題への問いがこの時期からの彼の思想史研究の動機の全てだったわけではなく、現代の問題が、思想史研究において正面に押し出されていたわけではない。しかし現代の問題は五〇代後半以降の彼の思想史研究全体の底にまぎれもなく貫いていた。そして、そのような関心を思想史の研究の主題の設定に媒介したのは、「強靱な機軸」としての思想的伝統（「日本の思想」一九五七年）への問い、およびそれと関連するように思われるいくつかの概念――規範概念としての「古典」、文化の「型」、精神的貴族主義 など――だった。

彼によれば、そのような伝統の解体が現代の危機の底にある。加えて、日本の場合には、元来そのような伝統の形成を阻むネガティブな「伝統」がこれまで支配して来た。そして、「第三の開国」すなわち第二次大戦の「戦後」において、日本における「機軸」としての伝統の欠如は、極限的な形であらわになった。このような境位において、過去の思想の解釈を通じて生ける伝統を形成することが、現

代の課題であろう。特に日本においては、「今にして私達は、はじめて本当の思想的混迷を迎えた……そこから何が出て来るかは何ともわからない。ただ確実に見えるのはこの地点から引き返すことはできないし、引きかえす必要もないということである」という、状況認識がのべられる（「日本の思想」。ここから「われわれの今日の責任と行動において「ネガ」像から「ポジ」像を読みとることが問題なのである」（「忠誠と反逆」一九六〇年）ということになる。つまり、「強靱な機軸」としてのポジティブな伝統の形成を阻んで来た、ネガティブな「伝統」の徹底した批判とそれをふまえた再解釈をも通して、ポジティブな伝統を形成すること、「思想の伝統化」（「日本の思想」）が、今まさに課題となっているのである。

戦後の丸山の思想史研究に対して、丸山は日本の思想の欠陥しか見ない、あるいは日本にとって「外来」の西欧思想を基準とすることによって日本に「土着」の思想的伝統の豊かさを軽視するにいたった、といった批判が繰り返されて来た。こうした批判の背景には、「民族」の思想的伝統や「土着」の民衆思想のすぐれた伝統を掘り起せという主張があり、それらには、多くの場合そうしたよき伝統の政治的効用に期待するプラグマティックな色あいが見られた。丸山は、このような批判を意識し、それに答える必要

を意識していた。³⁾しかし、五〇年代後半にいたって、彼の伝統への関心は、このようなどちらかといえは受け身のそれから、より積極的なものへと転回した。丸山はこの時期にいたって、進んで伝統の問題をとりあげ、その本質と、社会と個人とにとつての意味を問い、また、いかにして伝統を形成するかを論じるにいたった。

思想的伝統とは、西欧におけるキリスト教や中国の儒教のように、各時代を通じてすべての思想を否応なく関連づけ構造化し蓄積してゆく「機軸」であり、またそうして構造化され蓄積された思想でもある（「日本の思想」）。それは一方では、社会のあり方や個人の思考・行動を拘束する条件であるとともに、他方では「現代の生活に対して規範力」（丸山眞男教授をかこむ座談会の記録 一九六八年）をもち、かつ将来に向つては「文化の創造力の源泉」（同前）だった。このような認識の背景には、「過去の伝統との生き生きとした連関を自分の内面に」（座談会「フルトヴェンゲラーをめぐって」）有することが、人間にとつて決定的だという自我の本質理解があった。そのような伝統の喪失が現代人と現代文明の類廢の根源にある。現代の危機をのりこえるためには、現代の境位をふまえて、伝統を創造してゆかねばならない。丸山は、ネガティブな「伝統」が、「機軸」としての伝統の形成を阻げて来たと彼が認識する日本について、

ある場合には「現代文明はなるほどヨーロッパにとつては老齡期の到達点かもしれないけれど、日本にとつては、出発点で」、日本の過去のみならずヨーロッパのそれをも「自由な態度で操作」（傍点原文、以下同様）し「自由にわがものにして行」くことを説き、そのような営みに開かれた可能性は大きいとまで積極的な展望をのべたこともある（座談会「丸山眞男氏との一時間」一九六〇年）。

三、伝統の創出に向つて——従来の伝統観念の解体

丸山の伝統論は、日本にこれまで支配的だった伝統観念の批判と解体から始まる。

1 歴史の時期区分にとらわれて、特定の画期、とりわけ近代以前の思想であるという事実をもつて伝統とする。

2 社会において支配的だったという事実にもとづいて伝統とする。

3 有形無形の文化財として「保存」されている事実をもつて伝統とする（博物館的伝統）。

4 日本に「土着」であつて「外来」ではないという事実をもつて伝統とする（植物主義的伝統）⁴⁾。

こうした傾向に共通するのは、伝統の形成を特定の社会や

文化に、また歴史的時期に専属させ、過去の思想や文化が社会に支配的であり、また今日にまで連続しているという、さまざまな事実をもって伝統を定義する思考である。このようにとらえられた伝統に対する態度は、過去の事実を「保守的」にせよ、「革新的」にせよ、直接に無媒介に受け入れ連続させることである。こうした伝統の定義にも、伝統への態度にも、丸山は、彼が日本において真の伝統の形成を阻むネガティブな「伝統」としてとらえた思考がまさに現われているのを見る。その一つの要因は、特定の時間・空間に支配的な事実にもたれかかり、それを将来に向って連続させるという、非主体的な態度である。

四、伝統の創出に向って——ネガティブな「伝統」の批判

「ネガ」像から「ポジ」像を読みとる」という課題の基礎をなす半面は、「ネガ像」——「機軸」としての伝統の形成を阻むネガティブな「伝統」を、徹底的に認識し対象化する営みである。われわれを無意識のうちにとらえているネガティブな「伝統」を情緒的に美化したり、慨嘆したりするのでなく、徹底的に認識すること。それを通じてこの「伝統」から解放されること。丸山が過去の伝統を「自由」に「操作する」という場合の「自由」には、このような解放

としての自由が含意されていると解すべきであろう。ネガティブな「伝統」をそれとして認識するという営みは、丸山の「古層」——「執拗低音」論に展開されていたが、本報告では、そのような営みを前提とした上で企てられる、ポジティブな伝統の形成という、もう一方の面に焦点をあわせる。

五、伝統の創出に向って——いくつかの積極的提言

この点についての丸山の構想は、すでに見た、丸山が批判の狙いのぼらせた伝統についてのさまざまな通念の反転ということができる。第一に、伝統はむしろ「時間的には長い断絶を乗り越えても継受され、積み重ねられてゆくもの」（「文学史と思想史について」）である。アリストテレス——トミズム、子思・孟子後の「絶学」を乗り越えて朱子にいたる「道統の伝」はその典型である。時間の継起や時代区分や歴史的制約をこえて、古典と直接に対話するという主体的な営みが、このような伝統を支えるのだろう。第二に、伝統は地理的・文化的・国民的な境界をも乗り越えて形成される。ヨーロッパがパレスチナに生れたキリスト教をわがものとしたのを始め、ゲルマンの古代文明の受容などヨーロッパの伝統の形成にその例は豊かである（丸山眞男

氏との一時間)。おそらくこれに関係すると思われるが、丸山は特定の国民や文化の伝統は創出の目標だとは考えない。もしそれを目標にしたなら、生れるのはせいぜい「郷土芸術」的なものでしかないだろう(同前)。ペートーヴエンは普遍妥当な課題を我を忘れて追究することによって、はからずも「本当の意味でドイツ的な音楽」(同前)を創造した。日本の伝統に目もくれずに仏教や儒教の普遍的原理をひたすら学んだ道元や徂徠が、結果的に日本人としてオリジナルな仕事をした(同前)と説く。

とりわけ、ネガティヴな「伝統」の圧力が大きい日本思想史においては、その中で支配的になりえたという結果としての事実から遡及するだけでは不十分である。思想史の流れの中で「浮き上った例外」(一九六四年度講義、十七条憲法の基本精神について)にとどまったと見える思想も「後にいたって……思い出されて噴き上ってくることもある」(同前、日本思想史における仏教の普遍主義について)。思想の到達した結果だけでなく、思想が「孕まれて来る時点における」、多方向に向う「アンビヴァレントな……可能性」(思想史の考え方について)一九六一年)を探ることが、ネガティヴな結末にいたった思想の初発の混沌のうちにポジティブな可能性を読みとることが、課題となる(鼎談「思想の冒険」一九六一年)。

このように丸山において、伝統の形成とはすぐれて主体的な営みだった。「何を伝統とすべきかというのはわれわれの主体的な決断の問題」(日本思想史における「古層」の問題)である。現在の時点において将来に向っての課題を問い、そのような問いからも「われわれが主体的に……人類の過去の遺産から選択して、……われわれの栄養となり血肉と化したもの」(丸山眞勇教授をかこむ座談会の記録)がわれわれの伝統である。このように、地理的・文化的・国民的な壁をこえる、開かれた伝統形成の営みにおいて、日本におけるネガティヴな「伝統」からポジティヴな伝統を創出することが課題となる。

丸山における伝統の形成は個人個人の知的で主体的な営みとして考えられている。丸山において過去の思想を受けとめて現代に生かす知的営みを、彼は「読みかえ」その他の自家製のキイ・コンセプトで表現する。

現代の解釈学における、解釈という概念に対応することから丸山は自前の概念「読みかえ」や「思い出す」を用いるようである。「読みかえ」が指示するところからは多様であり、理論的に厳密な説明が与えられているわけではない。ただその中心を彼は、彼が最も親しんだ指揮者フルトヴェングラーの音楽理論に触発され、音楽の創造Ⅱ作曲および楽譜の解釈による演奏Ⅱ再創造についてのフルトヴェ

ングラーの説とのアナロジーで、過去の思想を「読みかえ」て現在に生かす営みについて語る。あくまで過去の思想のテキストに従ってそれを内在的に理解しなければならぬ。そのことは、必然的に読むものの解釈たらざるをえない。しかしそのことはまた読み取ったメッセージの現在に対する意味を問うことと関連する。その前提として、テキストを理解するためには、そこに最終的な「形象」をとった創造の過程の、始原の混沌にまで遡らなければならない。

丸山の「読みかえ」論は、伝統や古典の解釈についてのなんらかの既存の理論に依存し、それを適用するといったものではない。それはあくまで日本においてネガティブな「伝統」からも「機軸」としての伝統を形成しようとする関心からして、思想史研究の具体的な課題と格闘する中で編み出されたものだった。そうして、このような関心に促された、彼の思想史研究の作品をたどることは、丸山の「読みかえ」論の理解を助けるだろう。

六、モノグラフと講義

丸山が「第三の開国」Ⅱ戦後という時期に、ネガティブな「伝統」を徹底的に対象化することを通してポジティブな伝統をという構想を打出したのは「日本の思想」（一九五

七年）においてであった。この両面の営みは一九五〇年代後半から併行して進められていった。前者、ネガティブな伝統の認識Ⅱ批判は一九五六年度から講義を古代に遡らせ、六一年度から「伝統的なもの」を、そして六三年度から「原型」を考察の出発点にすえ、六七年度にいたっている。このような研究がモノグラフとして結実したのが一九七二年の「歴史意識の「古層」」だった。それと併行して、丸山の過去の思想からポジティブなものを読みとるという営みは、一連のモノグラフとして発表されていった。「開国」（一九五九年）、「忠誠と反逆」（一九六〇年）、「幕末における視座の变革——佐久間象山の場合」（一九六五年）などがそれぞれあり、「闇齋学と闇齋学派」（一九八〇年）にもそのような関心がうかがわれる。この中「幕末における視座の变革」は、象山がまさに儒学の伝統的範疇の「読みかえ」によって彼の時代における世界像の転換を示し進めた営みの分析であり、「忠誠と反逆」は、「封建的忠誠」が孕んだ可能性を問うという主題とともに、身分やそれに伴う名譽の感情、抵抗権など近代以前の思想に積極的意味を与えていることが注目される。

一九五六年以降、ことに六四年から六七年度までの一連の講義は、いわばネガティブな「伝統」の主潮の中にポジティブな伝統への可能性を探る企てだったということも出

来よう。そして五五年代前半までの講義において、儒教と国学が中心的な位置を占めていたのに対して、新たに光を当てられたのが、まず仏教だった。丸山は日本のネガティヴな「伝統」に転換を引き起こしうる普遍主義的思想として絶対的な普遍者を信じる仏教に儒教よりも高い可能性を見出だしたといえよう。聖徳太子と十七条憲法、最澄と叡山における教団形成、親鸞と真宗教団、一向一揆等がその焦点であり、それらの日本思想史における孤立性、あるいは、後にいたつての変質・墮落にかかわらずその意義が高く評価された。儒教においても、たとえば山県大弼のような「少数派」の思想家が「聖人の道」にコミットすることによってネガティヴな「伝統」を批判したのに注目される(一九六七年度講義)。「歴史意識の「古層」」以降の丸山の学問では、一連の「古層」論が多くの人の関心を集めた。しかし丸山においてネガティヴな「伝統」の解明はやはり「読みかえ」によるポジティヴな伝統の形成の前提としてあったのではなからうか。「古典」としての『文明論之概略』と時代の隔たりをこえて「直接の対話」を試みた、『文明論之概略』を読む』と一連の福沢研究も、そのポジティヴな企てに属するものだったといえよう。

以上は、丸山の著作や発言の中に鉅脈の露頭のように現れている、現代と伝統の形成、そして思想史研究について

の彼の考えを示す文章を整理したにとどまる。彼のこれらの思想の特質、その問題性などについては、別な機会にあらためて論じたい。

註

(1) たとえば、「徂徠学」論文第二節の1における、朱子学の「連続的思惟の解体」という行論で導入された、「ヨリ近代的な、ヘーゲルのいわゆる「分裂せる意識」という概念が孕む、近代批判の面。「福沢論吉の哲学」では、一方で「啓蒙」の歴史的限界を指摘するとともに、他方では福沢の思惟方法が「自然科学的方法に育てられながら」、一九世紀後半以降の「自然科学的世界像の陥ったパシミズム」や「機械的決定論の泥沼」(——丸山における「現代」の「危機」の重要な局面である)に足をとられることがなかった事実注目するがしている。

(2) 丸山における、危機としての「現代」について、彼自身が親しんだ、ヨーロッパにおける危機意識を表現する重要な著作の概観から説きおこした座談会「日本における危機の特性」一九五九年、がよい手がかりになる。伝統の解体と現代の危機との関連については、「伝統との生々とした関連を自分の内部にもはや感じなくなってしまう」ところに現われる現代音楽の諸相を、「近代人とその近代主義の帰結」として批判した、フルトヴェングラーの議論を、「歴史的過去をいきいきと現在の自分の内部に感じているかどうか、という歴史哲学の問題」としてうけとめた、座談会「フルトヴェングラーをめぐって」一九八三年、が丸

山の考え方をよく示している。

(3) なお、強靱な伝統との内面的対決をくぐって近代化を推進した中国と、そのような対決を欠いた日本の場合との対比をめぐる、竹内好との議論が、丸山の伝統への積極的関心を早くからうながしたように思われるが、ここでは立ち入らない。

(4) この問題についての丸山の考えが、比較的まとまっていれば、のべられている文章をあげる。

①座談会「丸山眞男氏との一時間」一九六〇年。

②一九六三年度講義中の「「伝統」の多様性」および一九六四年度講義第一章（『丸山眞男講義録「第四冊」』二五～三二ページ、および四九～五二ページ）。

③「日本思想史における「古層」の問題」一九七九年。

④「文学史と思想史について」一九八〇年。

⑤鼎談「伝統と現代をめぐって」一九八二年。②を承けて議論を展開している。

(前国際基督教大学教授)